

2024年1月21日 主日礼拝 降誕節 第4主日

説教題：「種の成長（4つの例）」聖書箇所：ルカによる福音書8章1-15節（117頁）

説教者：秀島牧師 招詞：讃美歌93 - 1 - 18 交読詩編：第98編1 - 9節（107頁）

讃美歌：83（聖なるかな）／227（主の真理は）／267（ああバツレヘムよ）／268（朝日は昇りて）／27

「今週の聖句」〔良い土地に落ちたのは、立派な善い心で御言葉を聞き、よく守り、忍耐して実を結ぶ人たちである。。〕（ルカ伝8：15）

「牧師室の窓」「ジェット機の惨事防ぎし乗務員 訓練奏（そう）す瞬時の判断」

「大寒の時を迎えて春を待つ 紅（あか）き椿に励まされたり」

（始めに）皆様おはようございます。今回も礼拝説教を始める前に一言申し上げます。元日の夕方に起きました能登半島地震により多くの人命が失われ、家屋や道路などの崩壊、火災被害がありました。お悔やみを、お見舞いを申し上げます。避難生活をしている人々の不自由さを思いつつ、介護や医療に携わる人々、生活基盤の復旧に従事する人々に感謝しています。今後の復旧再建に要する金額は約1兆円と見込まれています。この資金の使われ方は、今後、他の地域災害での重要な参考になり得ることと思います。また、過疎化している地域での産業の育成や人口の定着化も論じられていくことになると思います。加えて、日本基督教団や東京教区、北支区でも、被災地の教会支援のために牧師を数年間派遣することを検討しなければならないと思います。今日の聖書箇所は「種を蒔く」ことがテーマ・主題ですので、参考になりますでしょう。

（1）本日の聖書箇所はルカによる福音書8章1節から始まります。〔(8:1)すぐその後、イエスは神の国を宣べ伝え、その福音を告げ知らせながら、町や村を巡って旅を続けられた。十二人も一緒だった。〕と書かれています。弟子となった12人も一緒になって活動をしていました。彼らばかりではなく2節3節には〔(8:2)悪霊を追い出して病気をいやしていただいた何人かの婦人たち、すなわち、七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの女と呼ばれるマリア、/(8:3)ヘロデの家令クザの妻ヨハナ、それにスサンナ、そのほか多くの婦人たちも一緒であった。彼女たちは、自分の持ち物を出し合って、一行に奉仕していた。〕と記されています。2節に書かれている「マグダラの女と呼ばれるマリア」とは誰でしょうか。おそらくはルカ伝7章の終わりに登場した「罪深い女」であろうと考えられます。彼女は「石膏の壺に入った香油」でイエス様の足に塗り、イエス様から「あなたの罪は赦された」と言われたのです。この7章にはその人の名前がマグダラのマリアであるとは書かれてはいませんが、のちに、イエス様の十字架での処刑を遠くから見守っていたことや、その3日後の日曜日の朝にイエス様の遺体が納められていたお墓に行き天使に出会った人です。次に3節に書かれている「ヘロデの家令クザの妻ヨハナ」とは、ヘロデ大王の息子の一人、ヘロデ・アンティパスの総支配人であるクザの妻ヨハナであります。スサンナという人

は誰であるかは分かりません。3節には「そのほか多くの婦人たちも一緒にあった」と書かれています。ここから窺えることは、上流階級の女性も社会の底辺で生きてきた女性たちもイエス様の言葉を信じる人々の一員であったのです。3節の終わりには「彼女たちは、自分の持ち物を出し合って、一行に奉仕していた」と書かれていますので、ある種の共同生活、食べ物も共有していたものと推察することが出来ます。イエス様の宣教活動が社会の特定の階層に属する人々だけではなく、上層階級や中産階級を含めた幅広い人々に支持されていたと考えられます。この集団の人々は、イエス様の話を初めて聞く人々ではなくて、イエス様のお話をしばしば聞くことのできた人達です。と言うことは、イエス様の譬え話をある程度理解することが出来る人たちであったと推測出来ます。・・・新約聖書には譬え話が沢山書かれています。イエス様が話されているのです。と言うことは、イエス様は話題が豊富であり、聞く相手が理解を深めてもらうために状況に応じてお話をされたと考えられます。機会がありましたら、譬え話の幾つかを、南板橋教会での「交わり礼拝」や、「読書と祈りの礼拝」で、皆さんと共に学び会うことも楽しい礼拝になると私は思います。

(2) 扱て、今日の聖書箇所を読み進めて参りましょう。4節です。「(8:4)大勢の群衆が集まり、方々の町から人々がそばに来たので、イエスはたとえを用いてお話しになった。」皆様もこの中に加わってみて下さい。新約聖書のうち、共観福音書と言われるマタイ・マルコ・ルカの3つの福音書は文字を読むことは勿論大切ですが、それだけではなくて、書かれている場面の中に私たちが入り込んで、テレビの放送記者の様に実地体験することが大切です。その場面に咲いている野の花や土の色、食事の内容、人々の雑音がどの様であるかと言うことを実体験することです。・・・ではイエス様はどの様なお話をされたのでしょうか。5節から8節です。〔(8:5)「種を蒔く人が種蒔きに出て行った。蒔いている間に、ある種は道端に落ち、人に踏みつけられ、空の鳥が食べてしまった。/(8:6)ほかの種は石地に落ち、芽は出たが、水気がないので枯れてしまった。/(8:7)ほかの種は茨の中に落ち、茨も一緒に伸びて、押しかぶさってしまった。/(8:8)また、ほかの種は良い土地に落ち、生え出て、百倍の実を結んだ。」イエスはこのように話して、「聞く耳のある者は聞きなさい」と大声で言われた。〕イエス様は種蒔きの事を話し出されました。「種蒔き」とは小麦の種蒔きでしょう。・・・ガリラヤは北緯33度付近にあり、日本の長崎や熊本をほぼ同じ緯度にあります。小麦の種を蒔くのは10月下旬から11月上旬の時期と考えてよいでしょう。現在の種蒔きの方法は土を耕し一列ごとに土の中に種蒔きをしますが、この聖書の種蒔きは節分の豆まきの様に散らして蒔く、かつ、地面に直に蒔く方法です。農業技術が進んでいなかったと考えられます。それはともかく、イエス様が譬え話としてお話しされることの内容は、蒔かれた種がどの様に成長するのか、成長しないのかということにあります。4つのパターン、状況が示されています。

(3) 1番目のパターンは「ある種は道端に落ち、人に踏みつけられ、空の鳥が食べてしまった」。2番目のパターンは「石地に落ち、芽は出たが、水気がないので枯れてしまった」。3番目は「茨の中に落ち、茨も一緒に伸びて、押しかぶさってしまった」。そして、4番目は「良い土地に落ち、生え出て、百倍の実を結んだ」のです。そして、「聞く耳のある者は聞きなさい」とイエス様は大声で言われたのです。10節には「あなたがたには神の国の秘密を悟ることが許されている」と書かれています。そして、11節には「〔(8:11)「このたとえの意味はこうである。種は神の言葉である〕とまさに種明かしをされたのです。しかしここで要注意です。種を明かしただけでは問題は解決しないのです。その種明かしを何度も何度も、何回も何回も繰り返して、練習をして、初めて、種明かしの内容が身に付くのです。練習とは、訓練とは、1回2回繰り返すことではありません、10回20回でもありません。聖書を読むのもそうです。数回読んで分かった積もりでも理解したことにはなりません。結論を先に言いますと、今日の聖書箇所が一番最後には「御言葉を聞き、よく守り、忍耐して実を結ぶ」と書かれています。…私が高校生時代によく使われた言葉に「一知半解であってはなりません」という言葉がありました。一知半解とは、少し知っているだけで十分には分かっていない、なまかじりであること。浅はかな理解のことを言います。私は思うのですが、浅はかな理解のままでこの人生を終わってしまってよいのでしょうか。聖書を学ぶとは、「御言葉を聞き、よく守り、忍耐して実を結ぶ」ことであると思います。

(4)では、イエス様の種明かしを順番に見て行きましょう。第1パターンは12節です。〔(8:12)道端のものとは、御言葉を聞くが、信じて救われることのないように、後から悪魔が来て、その心から御言葉を奪い去る人たちである。〕ここには、聞いた御言葉が留まることもなく、直ちに消えてなくなってしまったのです。「空の鳥が食べてしまった」と言うことは、実にもったいないことです。…続いて、第2パターンは13節です。〔(8:13)石地のものとは、御言葉を聞くと喜んで受け入れるが、根がないので、しばらくは信じて、試練に遭うと身を引いてしまう人たちのことである。〕この言葉に皆様はどの様に感じられますでしょうか。新共同訳聖書には「試練に遭うと身を引いてしまう人たち」と翻訳されていますが、口語訳聖書には「試練の時が来ると、信仰を捨てる人たち」と翻訳されています。加えて、新しく出版された聖書協会共同訳聖書には「試練に遭うと落伍してしまう人たち」と翻訳されています。…私は長い人生経験の中で少なからずの人たちがそうでした。それは意志の強さや弱さとは異なります。聖書の中に、貧しい女性が神殿にごく僅かのお賽銭を入れる場面がありますね。レプタ2つの場面です。貧しい生活の日々であっても、この女性は神との約束を守り続けてきたのです。13節にある「身を引いてしまう」と言うことは約束を守らないと言い換えることも出来るでしょう。…続いて第3パターンは14節です。〔(8:14)そして、茨の中に落ちたのは、御言葉を聞くが、途中で人生の思い煩いや富や快樂に覆いふさがれて、実が熟するまでに至らない人たちである。〕ここには「茨の中に落ちた」と

書かれています。実に的確な表現であると思います。茨の木は縦横無関係に伸びてきますので、その中に種が落ちると、茨の枝が覆いかぶさり、種の成長が遮られるばかりだけではなく、日光も遮られてしまいます。「人生の思い煩いや富や快樂に覆いふさがれて」とは、判断力を失ってしまった状態を示しています。判断力を失うと言うよりは、自分に甘えていると言っても良いでしょう。私たちが教会の礼拝で交読文として詩編を読むことにしているのは、この14節のためにあると言っても良いでしょう。詩編には苦しい胸の中を主なる神との対話も多く綴られているからです。つまり、日常生活での葛藤を礼拝の交読文の中で礼拝参加者が心の罪を打ち明けて神に祈る場面でもあります。繰り返して申し上げます。交読詩編とは司式者と会衆とが互いに詩編を読みかわす形式をとっていますが、その本質は自分自身と主なる神との対話であります。形式と本質とを取り違えてはならないのです。

(5) そして、…第4パターンが15節です。〔(8:15)良い土地に落ちたのは、立派な善い心で御言葉を聞き、よく守り、忍耐して実を結ぶ人たちである。〕この15節の御言葉は一見すると、因果応報、勧善懲悪と受け取られかねない危険があります。併し、それこそ「一知半解」の理解の仕方です。何故ならば、今日の聖書箇所は7章の罪深い人を赦す物語の延長線上にあるからです。7章の終わりで突然に登場した「罪深い女」にイエス様は何とお話しされたのでしょうか。7章の最後50節です。〔(7:50)…「あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい」〕この女性は忍耐して今までの人生を歩んできたことでしょう。イエス様からの呼び掛けに生きる勇気を与えられたのです。私たちの人生に「ともし火」を燈す物語ではないでしょうか。…私は、牧師になる前の職業人時代に、大阪にある関西国際空港の基盤工事を点検するチームに参加したことがあります。一般の人たちの目に触れることは決しない場所ですが、最も重要な場所であります。空港の基盤を守ることが大切であるように、私たちの人生には「御言葉を聞き、よく守り、忍耐して実を結ぶ」ことが重要であります。この1年を「聞く耳のある者は聞きなさい」とのイエス様の御言葉を大切にする1年でありたいと思います。皆様の2024年が良い祈りの1年でありますように。

・・・お祈りいたします。